

環境の見かたの物志向性と場志向性

阿 部 一

要 旨

環境問題の本質的な解決のためには、人間が環境をどのように認知しているのかを明らかにする必要がある。環境は「物」と「場」から構成されているため、その「見かた」（環境認知の枠組み＝方向性）には、物を注視する傾向が強い「物志向型」と場に目を配る傾向が強い「場志向型」という類型が想定される。狩猟採集の時代を通じて、前者は男性的、後者は女性的な見かたとなった。農牧業の始まりとともに、西ユーラシアでは「有畜麦作」に従事する父性偏的な家族システムが成立し、男性的な物志向型の見かたが支配的となった。一方、モンスーンアジアでは「無畜稲作」に従事する母性偏的な家族システムが成立し、女性的な場志向型の見かたが優勢となった。物志向性は古代ギリシャの哲学の特徴であり、環境は見られるものの集合である「場所」としてとらえられた。場志向性は古代中国の思想の特徴であり、「自ら然る」場として山水の「風景」が見いだされた。環境の見かたは家族システムを通じて受け継がれ、それが西洋の「分析的」な思考様式と東洋の「包括的」な思考様式の違いをもたらしていると考えられる。

I はじめに

人間の活動による自然環境へのさまざまな影響が環境問題として取り上げられている現在、問題の実態を明らかにし、その対策を打ち出すことは、人類共通の課題である。環境破壊を犯罪行為とみなすならば、それは証拠を集め、犯人を検挙し、防犯対策をとることに相当する。これらの重要性は指摘するまでもないが、それとともに必要なのは、犯人の動機を明らかにすることである。なぜこのような犯罪が行われたのかを明らかにすることなしに、有効な防犯対策はとれないであろう。そのためには、犯人の生い立ちや性格、行動パターンなどに着目する必要がある。環境問題においてそれは、特定の人間集団の文化的な特色に目を向け、環境に対してとる態度を明らかにすることにほかならない。ある人間集団が環境をどのようにとらえているのかということを解明しなければ、その集団が引き起こしている環境問題の本質的な解決はできないであろう。

「環境をどのようにとらえているのか」という問いは、環境をどのように知覚し認識しているのかという問いに置き換えられる。そもそも、ここで言う環境とは、人間から独立して客観的に実在する世界のことでなく、「人間が知覚する世界」のことである⁽¹⁾。知覚の中心は視覚であり、われわれはおもに視覚を通じて環境をとらえ、その意味を読み取っている。そのため、環境とのかかわりあいにおいて、「見る」ということは特権的・中心的な地位を占める。日本語の古語において「見(み)」とは、

見ることに以外に、判断すること、分かること、ためすこと、読むこと、経験すること、男女の交わりをすること、世話をすること等であった。現代でもわれわれは、「甘く見る」(判断)、「話が見えない」(理解)、「触ってみ(見)る」(試行)、「メールを見る」(読む)、「馬鹿を見る」(経験)、「面倒を見る」(世話)などと表現する。

視覚に代表される知覚によってわれわれは環境の像を手に入れ、その意味を読み取っている。知覚し認識すること(認知)は、白紙のスクリーンに像が映るようなものではない。そこではつねにすでに何ものかに目が向けられ、そこから何かが「～として」読み取られている。すなわち、認知においては、知覚活動の方向づけと認識の枠組みとが前提となっている。そこで、「視覚を中心とする知覚によって環境の意味を理解するための暗黙の前提となっている枠組み＝方向性」を「見かた」と定義する⁽²⁾。われわれは、「見かた」(かた＝方＝方向性)によって知覚活動が方向付けられるとともに、「見かた」(かた＝型＝枠組み)を通して情報を受け入れる。見かたによって、環境は一定の見えかたをする。見かたと見えかたは相即不離である。見える対象なしに見かたが発動することではなく、見かたなしに対象を見てとることはできない⁽³⁾。

環境の見かたは、どのようにして身につくのであろうか。その基層に相当する部分は生得的なものであると考えられる。すなわち、進化の過程で生存に有利な見かたをもつ人間が子孫を残してきたことで遺伝的に受け継がれた、本能的な見かたがあると推測される。これは、基本的に人類にとって共通の見かたとなっており、その代表的なものが、顔を見分ける能力である。誕生間もない新生児であっても、丸い図形の中に両目と口に対応する位置に三つの点があれば、それを追いかけて見ようとする⁽⁴⁾。生得的な見かたには、男女の性差があることが指摘されている。たとえば、上から吊り下げた単純なモビールと若い女性の顔を見せると、女性の乳児は人の顔に興味をもち、男性の乳児は動くものに興味をもつ⁽⁵⁾。

このような性差をともなう生得的な見かたを土台として、われわれは文化の影響を受けつつ環境の見かたを身につける。その伝統的な学習の場とは、再生産可能な最少の人間集団である家族であろう。われわれは、父母子を基本単位とする家族という環境の中で、文化的な特色をもつ環境の見かたを受け継いできたと考えられる。家族システムは、伝統的な農牧業と結びついて生まれ、維持されてきた⁽⁶⁾。このような家族システムの違いにより、環境の見かたの特徴が異なることが予想される。本稿では、環境の見かたの根底的な違いについて検討し、その違いがどのようにして生まれ、それが文化にどのような影響をもたらしてきたのかを明らかにする。まず、環境の見かたに二つの基底的な類型が想定されることを示す(II章)。次に、見かたの二類型の生態学的起源を明らかにし、それらと基幹的家族システムとの関係について明らかにする(III章)。その上で、見かたの違いが古代の古典文化の特徴に反映されていることを例証する(IV章)。それは、人類の文化に大きな二つの潮流があることを示すことにほかならない。

II 環境の見かたの基底的二類型

生物は、それぞれの環境世界の中で生きており、環境世界の刺激に反応して行動している⁽⁷⁾。そこに

は、存在するものとの直接的な応答関係がみられるのみであり、生物はそれらが自分たちと切り離されて存在しているとは考えていない。言わば、生物にとって環境とは、生物自身にほかならない。ところが人間においては、そのような一体的な関係からの逸脱が生じている。われわれは、自分たちと切り離されて環境中に存在しているものがあるということを理解している。これが「存在了解」である。哲学者マルティン・ハイデガーが言うように、人間にとって、この世界に存在するものには、「ある」ということの理解が伴っている。これは、自分の存在についての了解と裏表の関係にある。人間は、「自分が世話をやいたり、それによって脅かされたりする諸物のほうから自分を了解している」のである⁽⁸⁾。それは、存在するものの方から自己が照り返してくるといった事態である⁽⁹⁾。

人間は環境との関係の中で自分以外の存在を見だし、それが自分という存在を照らし出す。このような関係において中心となっているはたらきとは、「見いだす」「照らし出す」という表現が示しているように、視知覚である。認知心理学によれば、視知覚における最も基本的な構造とは図と地の分化である。図(figure)とは視野において形として浮かび上がる領域であり、地(ground)とはその背景として知覚される領域である。図は形をもち、物の性格をもつ。地は形をもつとは言い難く、図の背後まで広がっている印象を与える。そして、図と地の境界線は図の輪郭線となり、図に所属している⁽¹⁰⁾。これは、環境において、われわれが物を知覚する際に経験している事態がどのようなものであるかを示している。われわれは日常的に、物に目を向けて、それらと関わり合っている。目を向けられている物は、他の物や未分化の領域を背景に浮び上がっている。前者の図としての「物」(thing)に対して、地としての後者は「場」(field)とすることができる。われわれにとっての物とは、何もない虚ろな抽象的空間に置かれた物体などではない。われわれはつねに、何らかの「場」の中にある「物」を認知しているのである。

「物」は「場」の中にある。言い換えれば、「物は場に於いてある」。環境の認知において、われわれは個々の物に焦点を当てることもあれば、個物よりも場の全体に目を配ることもある。したがって、「物」への注視と「場」への目配りは、環境の見かたの根底的な様相といえる。われわれは必要に応じてこの二つを使い分けているが、「物」を注視する際には「場」は後景へと退き、「場」に目を配る場合には「物」の仔細に目を向けきれないため、二つを同時に全うすることはできない。そのため、見かたにより、どちらか一方が優先される傾向があると考えられる。このことから、見かたに二つの類型を想定することができる。ひとつは、物を注視する傾向が強い見かたであり、これは「物志向型の見かた」(thing-oriented view of the environment)と呼ぶことができる。もうひとつは、場に目を配る傾向が強い見かたであり、これは「場志向型の見かた」(field-oriented view of the environment)と呼ぶことができる。志向とは、何かに向かっていることである。物志向とは、知覚において暗黙裡に物の方へと目を向ける傾向であり、場志向は場の方へと目を向ける傾向である。

物志向型の見かたによれば、環境とは基本的に物という要素の集合である。要素は互いに連関している。ハイデガーによれば、事物的に存在しているものには、特定の「向き不向き」(Bewandtnis)がある。物は、人間にとって「なにかをするために」存在している道具であり、物同士は道具の連関という関係のもとにある⁽¹¹⁾。環境とはこのような関係の全体である。物が人間に対して示す「向き不向

き」とは、認知心理学者ジェイムズ・ジェローム・ギブソンが提唱した「アフォーダンス」の概念に相当する。物は人間に対して、何ができるか(何をアフォードするか)を示すのである⁽¹²⁾。アフォーダンスという語を日本語にするのは難しいが、地理学者オギュスタン・ベルクがフランス語で「手がかり(プリーズ)」と訳しているのが参考になる⁽¹³⁾。われわれが目向けの物は、われわれに対してつねに何らかの手がかりを提示しているのである。

一方、場志向型の見かたによれば、環境とは基本的に事態・状況である。そこでの物は、環境を構成する要素というよりは、事態・状況という全体の一部分である。哲学者廣松渉が論ずるように、「もの」が名詞類で表わされるのに対し、事態・状況は文章態で表わされる「こと」である⁽¹⁴⁾。廣松によれば、「もの」の認識は「SはPである」という判断の構制(文章態)に従っており⁽¹⁵⁾、現前する何か(S)は、それ以上・以外の或るもの(P)として認知される⁽¹⁶⁾。「SはPである」という判断は、形式論理的にはSがPの内に包摂されることであり⁽¹⁷⁾、Pを外円としSを内円とする同心円で図式化される。この図式から理解されるように、「SはPである」とは「SはPに於いてある」ということであり、これは認知における「物は場に於いてある」という構図そのものである。そして、「物は場に於いてある」という「こと」(事態・状況)とは、環境のありようにほかならない。したがって、場志向型の環境の見かたとは、物を単独でとらえるのではなく、「こと」としての環境の本質的なありように基づいて、あくまでも物と場の関係に目向けの見かたであると言える。

物志向型と場志向型の見かたのどちらが優勢かは、人によって異なる。場志向型とは、心理学でいう「場依存性」が高いことに相当するものと考えられる。場依存性とは、対象物を知覚するときにその背景(場)に影響を受ける程度を意味する。そして、心理学実験により、対象物を背景(場)から切り離してとらえることが得意な人と苦手な人がいることが明らかにされている。このような能力には性差があり、平均的に女性は男性よりも場依存性が高いと考えられている。また、その違いには、文化の影響があることも指摘されている。農耕民は、狩猟採集民よりも場依存性が高い。これは、農耕民が他者との共同作業に従事する機会が多いことによるものと考えられる。伝統的な農業従事者と産業社会の人々を比べると、やはり前者の方が場依存性が高い。後者は、他者にあまり注意を払わずに、個人目標を追求しているからであると解釈できる。そして、狩猟採集民と産業社会の人々の場依存性は、ほぼ同程度である⁽¹⁸⁾。このような場依存性についての知見により、環境の見かたの志向性の違いは、生物としての人類の歴史の中から生じた男女の生得的な能力の違いが、生業にかかわる文化的な違いと結びついて生じていることが予想される。

III 物志向性と場志向性の生態学的起源

環境の見かたにおける志向性の違いは、人間集団と環境との関係という観点から議論されなければならない。なぜなら人間は、環境への適応の過程において、自立した個人として環境と向き合ってきたわけではなく、集団を通して環境にかかわってきたからである。最も基本的な人間集団は家族であるため、まず注目しなければならないのは、家族システムと環境との間に成立する関係である。すべての人間は子として生まれ、家族の一員として育てられる。家族のメンバーは、環境を認知し、それ

に対してはたらきかけることで、自らの生存と子孫の繁栄を図ろうとする。人類の歴史の長い期間、そのようなはたらきかけとは狩猟採集であり、そのはたらきかけに応じて環境と家族システムの在り方の間には安定的な関係が成立した。生得的な見かたはそのような中で生まれ、脳の機能の違いと結びついて遺伝的に受け継がれてきたと考えられる。

狩猟採集段階では、筋力のある男性が狩猟に携わり、女性が採集と子育てに携わるという分業が一般的であった。男性たちは、住まいから遠く離れたところまで出かけて獲物をしとめ、捕食動物や敵から家族を守り、そのための道具や武器を製作した。一方、女性たちは、住まいの近くで植物性の食料を集め、煮炊きをし、幼い子どもたちの世話をした。調理に必要な道具や衣服を作るのも女性の仕事であった。このような環境へのはたらきかけを通じて、男性は、長距離移動に必要なナビゲーション能力や、ものを投げて標的に正確に当てる能力が高い方が、子孫を残す確率が高くなった。一方、女性は、植物の生長の様子や子どもの顔つきの変化に気がつくような知覚的な識別能力が優れている方が、子孫を残せた。このような、自然淘汰の一種である性淘汰を通じて、男性と女性の脳には異なる特徴が生じたと考えられている⁽¹⁹⁾。

男性と女性の脳の違いとして典型的なのが、空間把握能力と言語能力である。心理学者ドリーン・キムラが指摘しているように、空間把握能力は男性の方が優れており、言語能力は女性の方が優れている。男性はほとんどの空間能力テストで女性より優勢であり、特に心的回転と標的当ては明らかに男性優位である。それに対して、女性は男性より単語の綴り能力が高く、語頭や語尾に特定の文字をもつ語を挙げるテストや単語記憶のテストでも女性の方が優れている⁽²⁰⁾。心理学者サイモン・バロン＝コーエンは、キムラの議論を受けて、男性型の脳はシステム化する傾向が強く、女性型の脳は共感する傾向が優位であると論じた。そして、男性が空間把握能力に優れているのは、それがシステム化の一種であるからであり、女性は共感する能力が高いために言語能力が優れていると考えた⁽²¹⁾。

システム化とは「システムを分析、検討し、システムのパターンを支配する隠れた規則を探り出そうとする衝動や、システムを構築しようとする傾向」である。ここでいうシステムとは、インプットに対して「～すれば…になる」という規則に従ってアウトプットを生じるもののことである⁽²²⁾。システム化する傾向は、狩猟と追跡に有利である。自然というシステムを理解し利用することで、獲物を追い詰めることができる。道具を製作し、利用するうえでも、システム化する能力が高い方が有利である。工夫を重ねてすぐれた道具を作ったり、その使い方を改善したりすることは、「～すれば…になる」という規則性を明らかにすることなしには難しい。また、社会もシステムであるため、階層構造という規則性を理解することで、社会的地位を上げることが可能になる。そのようにして権力を手にし、支配的な立場に立てば、多くの子孫を残すことができるであろう⁽²³⁾。

一方、共感とは「ほかの誰かが何を感じ、何を考えているかを知り、さらにそれに反応して適切な感情を催す傾向」である⁽²⁴⁾。このような傾向は、人口の少ない狩猟採集の時代において、自分の所属する少人数のコミュニティを安定化させるという利点をもつ。また、子どもの気持ちに敏感であることは、子どもが放置される可能性が低いことであり、子どもの生存にとって有利である。さらに、共感によって、子どもは精神的に健やかな状態で成長し、おとなになってから安定した人間関係を築く

ことができる。このようなおとなが親になって子育てをすることを考えれば、共感の子孫を残すために有利に働く形質であることは明らかである⁽²⁵⁾。

男性に優勢なシステム化する能力は、物志向型の環境の見かたと親和性が高い。システムとは物(要素)同士の結びつきであり、システム化において必要なのは個々の物に目を向け、その動きや形状をしっかりと把握することである。そのため、男性は、与えられた物が別の方向から見るとどのように見えるかを想像する心的回転の課題が女性よりも明らかに得意である⁽²⁶⁾。一方、女性に優勢な共感する能力は、場志向型の環境の見かたと結びつく。共感する能力は、まわりへの知覚的な識別能力の高さを前提としている。実際、女性は、対象をすばやく比較する能力(知覚速度)及び表情や身振りの読み取りにおいて男性よりもすぐれている⁽²⁷⁾。また、一定の配列内における物体の位置を記憶するのも一般的に女性の方が得意である⁽²⁸⁾。それは、知覚している環境の全体すなわち場に目を配る能力がすぐれていることを意味する。注意すべきなのは、システム化する傾向は女性ももっており、逆に共感する傾向は男性にもあるという点である。性差はあるものの、すべての人間は基本的に二つの傾向を保持している。その共通性を土台として、始原的な農牧業とともに成立した家族システムにおける父母子の関係の中でどちらの能力が重視されるかにより、社会全体の環境の見かたの違いがもたらされた。

およそ1万1000年前、人類は農耕の段階に入った。最も初期の農牧業はユーラシア大陸の西に位置する西南アジアで成立した。西南アジアの肥沃三日月地帯では、小麦や大麦などの栽培が西暦前9000年頃、羊や山羊の飼育が西暦前8000年頃に始まった⁽²⁹⁾。この地域は、夏に乾燥し冬に多少の雨が降るといふ地中海性気候であり、その気候に適応した麦類や豆類は、冬の雨季に一気に成長して実をつける一年生植物であって、栽培しやすかった⁽³⁰⁾。また、夏に乾燥するため周辺には草原が広がっており、そこに群れを作る草食性の有蹄類が生息していた。群れを作る動物の集団は序列性をもつため、人間が序列の頂点に立つことで効率よく群れを支配できた⁽³¹⁾。

羊や山羊の群れが大きくなると定住地周辺での草の確保が難しくなるため、西南アジアでは日帰りの放牧がおこなわれていたと考えられる。それが、家畜に対するさまざまな介助技法を発展させた。牧夫は出産のたびに母子ペアの特徴を記憶し、年齢に応じて計画的な間引きをするなどの管理をおこなう⁽³²⁾。父親である牧夫は、息子を放牧の手伝いに連れ出し、介助技法を教え込む。母親は家で家事、育児、畑仕事、搾乳などに従事する。このような家族システムでは、家畜の群れの管理者である父親が、家族をも管理・統制している。そして、牧畜技術の伝承を通じて、父と息子のつながりが強いものとなっている。このように「父親中心性」が卓越し、「父—息子」の心理的な縦関係によって維持されている家族システムのあり方を父性偏向家族システムと呼ぶことにする⁽³³⁾。「有畜麦作」を生業とするこの家族システムでは、システム化の傾向が強い男性型の脳が優位に立つ。家畜は1頭1頭が個体として識別されており、それを増やし、必要に応じて間引きするのは、年齢階層性をもった家畜群というシステムを運用することにはほかならない。家畜は人間に利用される「もの」であり、放牧の際には、移動の目標となる「もの」に目が向けられる。このように、父性偏向家族システムでは、物が注視される傾向が強いため、物志向型の見かたが支配的となる。それは家族内での男性＝父親の権力的

な優位性と一体となっているため、女性的な共感する能力に結びついた場志向的な見かたは抑え込まれがちとなる。

ユーラシア大陸の東の中国南部では、遅くとも西暦前7500年頃までには米の栽培が始まり、豚の飼育も行われるようになった⁽³⁴⁾。この地域は、急峻な山地と谷からなる地形に水蒸気を運ぶモンスーンがぶつかることで、山腹斜面に大量の雨がもたらされる。この雨を利用し、山腹斜面や河川上流部の谷筋、河川中流部の氾濫原で稲作が行われた。このような立地での水田規模は小さくならざるをえない。また、雨の多い気候のもとでの植生は草原ではなく森林となるため、草食の大型哺乳類を群れて飼育する機会もなかった。そのため、モンスーンアジアでは、草原で家畜を飼育することなく小規模な水田や家の周囲の畑を夫婦で耕す「無畜稲作」が生業となった。このような農業では、力仕事は水路の修復や田起こしなどに限られているため、明確な性的分業がみられない。夫婦の協働により、家族単位で生計を維持していくことができるため、子どもと母親との心理的な密着度は高いものとなる。とりわけ、母と娘の関係は密接であり、娘は歳をとっていく母親の役割を分担するようになり、家庭生活は母娘関係が軸となる。このように、「母—子」の心理的な密着関係によって維持されている家族システムのあり方を母性偏向家族システムと呼ぶことにする⁽³⁵⁾。「無畜稲作」を生業とするこの家族システムでは、父母子が安定的に協力しあうことが重要であり、そのため互いの「こと」に細かく気配りすることが求められる。また、水田や畑では、知覚的な識別能力を発揮して、作物の「こと」に鋭敏になることが必要である。これは、場に目を配ることであり、母性偏向家族システムでは場志向型の見かたが優勢となる。この見かたは、どちらかといえば女性的＝母性的な能力と結びついているが、父や息子であってもそれを優先的に作動させることが求められる。

IV 環境の見かたと古代の古典文化

1. 古代ギリシャ・ローマの物志向的な見かた

西南アジアを起源とし西ユーラシアに広がった「有畜麦作」のもとで、父性偏向家族システムを通じて、物志向型の環境の見かたが受け継がれてきた。それは古代ギリシャ・ローマの文化的特徴にも明らかである。西洋哲学の源泉である古代ギリシャの哲学は、自分たちが知覚した対象物それ自体を観察し分析するという姿勢を基本としていた。個々の物へのまなざしは、その物のはじまりや本質がどのようなものかという問いへと結びつく。西暦前6世紀のイオニアの自然哲学者たちは、そのような原初物質(要素)をアルケーと呼んだ。地・水・火・風の「四大」や原子(アトム)などがアルケーとして想定されたものである。西暦前5世紀には、ものごとの本質として、理想的な「まさに～であるもの」の存在が想定された。それが、プラトンの「イデア(idea)」である。イデアとは、見るという意味の動詞である「idein」に由来しており、もともとは「見られるもの」、ものの「姿」「形」を意味していた。ギリシャ語の見るという動詞には「idein」のほかに「eido」があり、その過去形である「eidon」に由来する「エイドス(eidos)」も「見られるもの」「姿」「形」の意であった⁽³⁶⁾。アリストテレスはプラトンの「イデア」を具体的なものごとの内にある「エイドス(形相)」に置き換えた。このように、古代ギリシャの哲学においては、一貫して「見られるもの」に目が向けられた。

このような見かたのもとでは、ものはアルケーすなわちものの本性(フシス)から生じると考えられる。フシスとは、ヘラクレイトス(西暦前500年頃)の断片にみられる最古の用例によれば、ものの「本来あるがままの姿」を意味する。ものは、フシスから自分自身を生み出す(フエイン)のである⁽³⁷⁾。このフシスが、古代ギリシャ人にとっての自然であった。それは自己生成するもののことであるが、知覚した対象物の本性としてとらえられたため、それを見る人間は自然から除外されることになった。古代ギリシャ人は、宇宙から人間と人間の文化を除いたものが自然であると定義したのである⁽³⁸⁾。

物志向的な傾向は、詩歌や絵画におけるいわゆる風景表現においても見いだされる。とりあえず環境の「見え」の表現を風景表現とするならば、古代ギリシャにおける風景表現は「牧歌」に始まる。ヘレニズム時代に生まれた牧歌の元祖は、シチリア島に生まれアレクサンドリアで活躍した詩人テオクリトス(西暦前300頃～前260頃)である。彼の作品は『エイデュリア(Eidyllia)』と呼ばれる。これは、ギリシャ語の「eidos(見えるもの、形)」+「yllion(指小接尾辞)」であり、「小景」と訳すことができる。したがって、そこには環境において見えるものを限定的に取り上げることが含意されている。エイデュリアには、牧人が野山でうたう様子を描く作品が多いため、英語の idyll などが牧歌という意味をもつようになった⁽³⁹⁾。牧歌は、牧人に見えているものを並べることで、ひとつの場面を描き出す。たとえば、『エイデュリア』の第7歌「収穫祭」では、疲れた旅人が環境のいくつもの要素によってなぐさめられる。横たわる旅人の頭上にはポプラと榆の枝葉がそよぎ、近くのニンフの洞からは清い泉が流れ出る。枝陰ではセミが鳴き、鳥たちがうたい、蜂がブンブン飛び回る。梨やリンゴが転がり、スモモの枝が地面にしなだれて、収穫の香りが満ちているのである⁽⁴⁰⁾。牧歌のこのような特徴は、北イタリアのマントバ近郊で生まれた古代ローマ随一の詩人プブリウス・ウェルギリウス・マロ(西暦前70～前19)でも同様である。西暦前39～37年頃に刊行されたと推定されるウェルギリウスの『牧歌』⁽⁴¹⁾の第1歌では、内乱のために故郷の田園を去っていく羊飼いのメリボエウスが、田園に残る老人のティテュルスに、牧場の美点について語る。ティテュルスの牧場には、慣れ親しんだ川や聖なる泉や涼しい木陰がある。そこでは、柳の花を吸う蜜蜂が羽音を立て、榆の梢で鳥たちが鳴くのである⁽⁴²⁾。このような、緑の木々、花の咲く野、泉や小川が配され、鳥の鳴き声や蜂の羽音が彩る牧場こそ、伝統的な牧歌の舞台である。それは文学用語で「甘美な場所(ロクス・アモエヌス locus amoenus)」と呼ばれている⁽⁴³⁾。牧歌は、詩にふれる者が理想的なものとして思い描くことのできるひとつの場面を描き出しているのである。

「見えているもの」ひとつひとつの集まりとしての場所を描くのは、ローマ時代の「牧歌的神域風景画」や「別荘風景画」と呼ばれる絵画においても同様である⁽⁴⁴⁾。牧歌的神域風景画は、「聖樹や田園の小神殿、神聖な円柱、彫像、奉献物、葬祭モニュメント、農夫たちの家や家畜小屋などが画面の主要構成要素として現われる」絵画のことである。そこにはほとんどつねに、「祈願していたり供物を捧げていたりする人物」や「田園における日々の労働にいそしむ人物」が描き込まれている⁽⁴⁵⁾。建築家ウィトルウィウスは、西暦前25年頃執筆した『建築書』(VII, 5, 2)の中で、十分な空間があるという理由で遊歩廊に描かれた当時の風景画に、港、半島、海岸、川、泉、海峡、神殿、森、山、家畜、牧夫

のようなモチーフが見られたと述べている⁽⁴⁶⁾。牧歌的神域風景画の風景モチーフの中には、ヘレニズムの壁画にも見られるものがあるため、その起源は古代ギリシャに遡る可能性がある。一方、「別荘風景画」は確実にローマ起源である⁽⁴⁷⁾。それは、別荘を主要モチーフとした風景画であり⁽⁴⁸⁾、博物誌家ガイウス・プリニウス・セクンドゥス(23頃～79)は、77年に完成した『博物誌』(XXXV, 116f)の中でその始まりはローマ帝国初代皇帝アウグストゥス(在位西暦前63～後14)の時代であり、ストゥディウス(写本によってはルディウス)が最初に手がけたと述べている。それによれば、別荘風景画とは「別荘や柱廊(写本によっては港)、種々さまざまな風景——神域、森、丘、池、運河、河川、海岸、人がのぞみ得るような景色のすべて——、そしてさらにさまざまな活動にいそむ人々、歩行者や航行者、小さなロバないし馬車に乗って別荘に向かう人々、釣り人、鳥を猟する人々、狩猟や収穫に出かける人々などを表わした壁画」であった⁽⁴⁹⁾。

これらのローマ絵画の中には、基本的に人間が描かれている。人間の姿が表現されていない場合でも、人間の営みを見いだすことができる。したがって古代ローマ人は「純粹なる風景画、風景のための風景画」を知らなかった⁽⁵⁰⁾。ペルクが指摘するように、古代ローマ人には「風景としての風景の意識」と「風景を風景と呼ぶ語」が決定的に欠けていた⁽⁵¹⁾。ウィトルウィウスは「いろいろな風景画」と訳される箇所「*varietatibus topiorum*」と記している。ラテン語「*topiorum*」の単数形は「*topia*」であり、これは通常「風景画」と訳される。その語源はギリシャ語の「*topia*」であり、その単数形「*topion*」は「*topos*(トポス)」(場所)の指小形である。また、プリニウスの記述の「甘美な風景」と訳される部分も、「*amoenissimam parietum picturam*」であり、これは「甘美な壁画」という意味でしかない。したがって、古代ギリシャ・ローマにおける環境の見えかたを風景と呼ぶのは適切ではない。牧歌でうたわれたのが「甘美な場所」であり、ポンペイの壁画に描かれたのが語源的に言えば「小さな場所」であったことを考慮すると、それは「風景」ではなく「場所(トポス)」と呼ぶべきである。古代ギリシャ・ローマでは、物志向型の見かたによって、環境は見える「もの」のひとまとまりの集合すなわち場所としてとらえられていたのである。

2. 古代中国の場志向的見かた

中国南部を起源としモンスーンアジアに広がった「無畜稲作」のもとで、母性偏向家族システムを通じ、場志向型の環境の見かたが受け継がれてきた。古代中国の思考様式における場志向性の強さはそれを反映していると考えられる。古代中国の思想には二つの主要な流れがある。ひとつは道家思想であり、もうひとつは儒教思想である。道家思想では、万物の秩序を陰と陽の結合と離反によるものと見なし、万物の生成から死滅を経て再生にいたる変化の法則を「道(タオ)」としてとらえた。そして、老子(西暦前5～6世紀頃?)や莊子(西暦前4世紀頃)は、人間の生き方を「道」と融合させることを説いた。環境は調和のとれた場であり、人間はその中に在って、環境との同調をはかるのである。これは、環境の全体に目を配る場志向型の見かたによる、人間と環境の関係のあり方にほかならない。一方、儒教思想は人間同士の関係のあり方についての思想である。孔子(西暦前551～前479)を開祖とする儒教は、人間関係の正しいあり方に関心をもち、君臣、父子、夫婦といった関係における秩序を

重視した。人間社会は、個人の集合ではなく、調和的であるべき関係の網の目である。このような人間関係は、ひとつの場を形成しているといえる。人間はその場の中でしかるべき義務を果たすことが求められる。そのような義務は、秩序を成り立たせているという意味で「道」にほかならない。そのため、儒教思想では、人間社会に秩序をもたらし義務が人の守るべき「道」としてとらえられた。

「道」の観念は、中国における自然の観念と密接に結びついている。『老子』の第25章には「人は地の^{のつと}に法り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法る」とある⁽⁵²⁾。自然とは「自^{おの}ら然^{しか}る」であり、人為を加えず本来のままであることを意味する。すなわち、「自ら然る」状態が道なのであり、本来のままであることで万物は調和しているのである。そのため、人間も本来のあるがままの生き方をすることで、「道」との合一をはかることができると考えられた。それは儒教的な人間関係からの離脱であり、3世紀中頃の「竹林の七賢」と呼ばれる知識人たちがそのような生き方を代表している。老荘思想の流行を背景として、隠遁の場として見いだされたのが山林や丘山であった⁽⁵³⁾。それは、晋代(265～420)になると、孔子の『論語』「雍也篇」にみえる「知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ」を踏まえて、山水と称されるようになった⁽⁵⁴⁾。さらに、山水は「自ら然る」場として「自然」と呼ばれるようになった⁽⁵⁵⁾。そのため「山水に遊ぶ」ことで、自然の真理としての「道」を会得することができると考えられた。

山水は、隠遁者が遊び楽しむ場となった。晋が洛陽に都を置いていた時代である西晋(265～316)の左思(250?～305?)は、『招隱の詩』に「必ずしも糸^{こと}と竹^{ふえ}とのみに非ず、山水には清き音あり」と書いた。これは、隠者を招こうとして山中を訪ね、その風景に魅せられてしまったという内容の詩であり、「山水には清き音あり」という句は、山水が好ましい場として認識されるようになったことを示している⁽⁵⁶⁾。晋が江南に移って建康(南京)に都を置いた時代である東晋(317～420)の王羲之(307?～365?)は、会稽の蘭亭において流觴曲水の宴を開いた。蘭亭には、「崇^{たか}き山、峻^{けわ}しき嶺、茂れる林、脩^{なが}き竹」があり、「清き流れ、激^{なが}しき湍^{なが}れ」が見られた。参加者たちは蘭亭の風景を「山水」とよび、その眺めを楽しむことで「心神^のを暢^のばし」た⁽⁵⁷⁾。山水に遊ぶことによって、詩人たちは人間本来のあるがままの心情を取り戻したのである。

山水や田園に隠遁するということは、山水や田園という場の中に入り込んで、まわりにあるものと心を通わせ、それにより本来の自分に帰ることであった。晋代の終わりに世に出た二人の詩人、陶淵明(365～427)と謝靈運(385～433)は、そのような場を描き出した。最初の田園詩人と呼ばれる陶淵明は、41歳で仕官を拒否し、郷里に隠遁した。『園田の居に帰る』五首には、「性本^{せいも}と邱山^{きゅうざん}を愛す」自分が田園に戻って、荒地を拓き、隣人と交わり、耕作に励み、林野で遊ぶ様子が描かれている。このような場に戻ってきたことを、陶淵明は「復た自然に返るを得たり」と詠んでいる⁽⁵⁸⁾。田園において、陶淵明は本来あるがままの自分を取り戻したのである。久しく山沢の遊びから遠ざかっていた陶淵明は、山野を娛しみ、山の清らかで浅い水で足を濯ぐ。そのような散策の中で、荒れた村里を目にして、人生は幻でありいつかは「空無に帰す」ということを痛切に感じる⁽⁵⁹⁾。そこには、目に見えるものへの共感がある。田園に帰る喜びを歌った『帰去来^{ききらい}の辞』にも、見えるものに心を感じ、それとの一体感をもつ陶淵明の姿がある。杖をついて散策し、頭をあげてはるかに観ると、「雲は無心に以て岫^{みね}を

いで、鳥は飛ぶに倦きて還るを知る。景は翳翳として以て将に入らんとし、孤松を撫でて盤桓す」⁽⁶⁰⁾。雲や鳥に心を感じ、松と心を通わせることで、陶淵明はそこを去りがたい気持ちになっているのである。

最初の山水詩人と呼ばれる謝靈運は、仕官と隠遁との間で揺れ動き、仕官を追い求めつつ隠遁を唱えた人物である。そのため、田園生活を送りながら自然と一体化するのではなく、山水に遊ぶことで無為自然の道を体得しようとした。政治に関する関心を持ち続けた謝靈運と、その目で見られた山水との間には、一定の距離があった。その心的な隔たりにより、山水そのものが詩の対象となったのである。たとえば、会稽の始寧に隠棲した際に、紹興の近くにある斤竹澗をへて嶺を越えて谷川を渡ったときの様子を描いた『斤竹澗より嶺を越えて溪行す』という詩の冒頭では、その清き流れが「蘋と萍は沈深に泛び、菰と蒲は清浅を冒う」と描写される。ただし、山水は単なる眺めの対象ではない。そこは自然との交流の場である。謝靈運は「石に企て飛泉を抱み、林を攀きて葉巻を摘る」のである⁽⁶¹⁾。山水と一定の距離を置きながら、それと交わるという態度は、謝靈運が造り出した「賞心」ということばにも表われている。これは自然を味わう心を意味する。謝靈運は、始寧に園を樹り、流れを激いで、援を植え、その中で隠遁生活を送りながら、「賞心は忘る可からず」と歌った⁽⁶²⁾。園とは人工的な自然であり、その中で自然を味わう心を忘れてはならないと詠じているのである。これは自然を対象化しつつ、それとの心的な交わりを求める態度にほかならない。

自然としての山水を対象化しつつ、それと心的に交わるために描かれた絵画が、山水画であった。初期の山水画の記録として重要な顧愷之(344~408?)の『画雲台山記』によれば、陰しく切り立った山の狭間に溪谷がある風景こそ典型的な山水画のモチーフであり、それを眺める者の心はその風景に入り込むことができるとされた⁽⁶³⁾。最初の山水画論である『画山水序』を記した宗炳(373~443)は、各地の名山を自身で訪れた。歳をとって山歩きができなくなると、家の画室の壁に名山を写し描いて、絶えずその絵と向かい合った⁽⁶⁴⁾。それが「臥遊(寝たまま遊ぶ)」である。『画山水序』の冒頭では、「山水は質は有にして、趣は霊なり」と述べられている。山水は存在するものであると同時に、「道」としての精神性をもっているのである。したがって、山水を楽しむことは「道」を楽しむこととほとんど同じである⁽⁶⁵⁾。山水画家は、自然の姿に現われた「道」を画面に描き出すことで「道」を体得できる。ただし、そのためには山水と距離をとり、対象化する必要がある。『画山水序』には「絹の画布をひろげ、はるか遠景を描くと、崑崙山でさえも、一寸四方の空間のなかにかこむことができる」とある⁽⁶⁶⁾。これは、枠に絹を張り風景を透かし見て、その上に絵を描く方法であり、一種の遠近法である。山水は、対象化された上で、見る者がそこに没入する場として描かれたのである。

見る者が入り込めるこのような場の表現は、風景と呼ぶことができる。中国語の「風景」はもともと風と光を意味する。その最も早い用例のひとつが『世説新語』(3~4世紀頃)に見える。洛陽から江南の健康へと移ってきた人々が健康の郊外で酒宴を開いた際、周顒が「風と景は変わっていないのに、みわたせばいずこも山や河には異なったところがある」と嘆いた⁽⁶⁷⁾。この用例から、風景が個々の山や河の眺めではなく、場の全体を指し示していることが読み取れる。風や光に注意を向けるのは、場志向性の反映である。そこで、本稿では、場志向型の見かたにおいて対象化された環境の現われを

「風景」と定義する。古代中国における山水とは、このような意味での風景であった。

V まとめ

環境は「物」と「場」から構成されている。そのため、環境認知の枠組み＝方向性としての環境の見かたには、二つの基底的な類型があると考えられる。ひとつが物を注視する傾向が強い「物志向型」の見かたであり、もうひとつが場に目を配る傾向が強い「場志向型」の見かたである。どちらの見かたが優勢かは人によって異なるが、一般的に男性は物志向型の見かた、女性は場志向型の見かたが優勢であると考えられる。

狩猟採集の時代におもに狩猟に携わってきた男性は、システム化する傾向の強い脳をもつ。システムとは物(要素)同士の結びつきであり、システム化において必要なのは個々の物に目を向け、その動きや形状をしっかりと把握することである。このような見かたとは物志向型にほかならない。一方、おもに採集や子育てに携わってきた女性は共感する傾向の強い脳をもつ。共感に必要なのは、まわりの事態・状況に注意を払い、その変化に反応することである。これは場志向型の見かたと強い親和性をもつ。

ユーラシア大陸の東西で生じた農牧業の始まりとともに、「有畜麦作」を生業とする西ユーラシアでは、牧夫である父親の中心性が卓越し、「父－息子」の心理的な縦関係によって維持されている父性偏向的な家族システムが成立することで、男性的な物志向型の見かたが支配的となった。一方、「無畜稲作」を生業とするモンスーンアジアでは、母親と子どもとの心理的な密着関係が強い母性偏向的な家族システムが成立することで、女性的な場志向型の見かたが優勢となった。

西ユーラシアにおける「物志向性」は、ギリシャ・ローマの古典文化を特徴づけている。それは、古代ギリシャ哲学、自然(フュシス)の観念、古代ローマ的な風景表現において明らかである。古代ギリシャの哲学は、「見られるもの」に目を向ける傾向があった。自然とは「見られるもの」の本性(フュシス)であり、それは見る立場の人間から切り離された。また、牧歌や壁画においても、要素としての見られるものとそれにはたらきかける人間が描かれた。物志向的な見かたによって見いだされるこのような環境は、風景ではなく「場所(トpos)」と呼ぶべきである。

モンスーンアジアにおける「場志向性」は、中国の古典文化を特徴づけている。それは、古代中国の思想、自然(自ら然る)の観念、山水の風景表現において明らかである。古代中国の思想は場の調和を重視するものであり、その秩序を成り立たせている法則が「道」としてとらえられた。道とは「自ら然る」状態すなわち自然であり、それは田園や山水において体得できるものであった。そのため田園詩や山水詩においては、田園や山水という場に入り込んで、まわりにあるものに心を通わせ、それにより本来あるがままの自分を取り戻す隠遁者の姿が描かれた。山水画も、眺めることで山水という場に没入することができることが理想とされた。このような山水とは、場志向的な見かたによって見出された環境であり、それを「風景」と定義することができる。

環境の見かたの西ユーラシア(西洋)における物志向性とモンスーンアジア(東洋)における場志向性の違いは、現代の西洋と東洋における思考様式の違いに結びついていると考えられる。アメリカの社

会心理学者リチャード・E・ニスベットは、心理学実験をもとに、西洋人(主としてヨーロッパ、アメリカ、旧英連邦の人々)と東洋人(主として中国、韓国、日本の人々)の物事の見方・考え方が異なることを示した。ひとことで言えば、西洋人のそれは「分析的(analytic)」であり、東洋人のそれは「包括的(holistic)」なのである。分析的なものの見方とは、目立つ対象物(オブジェクト)とその性質に焦点を当てる見方であり、包括的とは、実体(サブスタンス)の連続性と環境の中での関係に焦点を当てる見方である。西洋人は、世界を対象物すなわち「もの(things)」の集まりとして見ており、東洋人は世界を連続的な実体すなわち「材(matter)」の総体として見ている。そのため、注意を向ける先も異なる。西洋人は対象物に多くの注意を払い、東洋人は環境に多くの注意を払っている⁽⁶⁸⁾。このことから、分析的な見方・考え方は物志向型の見かたに対応し、包括的な見方・考え方は場志向型の見かたに対応するものであると考えられる。

ニスベットは分析的なものの見方と包括的なものの見方の違いをもたらしたものについて、①生態環境の違い→②経済・社会構造の違い→③注意の向け方の違い→④世界の本質についての信念の違い→⑤暗黙の認識論・認知プロセスの違いという流れで説明している。ギリシャは、①山岳地帯が多く、海岸線まで山が迫っているため、狩猟・牧畜・漁撈・貿易に適しており、土壌と気候がワインやオリーブオイルの生産に適していたため、農耕はすぐに商業化がなされた。→②他者との協力はあまり必要でなく、市場や政治集会で意見を戦わせていた。→③他者との関係に縛られることなく、対象物や対象物に対する自らの目的に注意を向けることができた。→④ものごとの原因を対象物の性質や対象物に対する自らの行為のうちに見出した。→⑤対象物を場から切り離して、そのカテゴリーを推測し、そこにどのような規則が適用されるかを推測する認知プロセスが発達した。一方、中国は、①草原、低い山々、航行可能な河川をもつため、農耕に好都合であり、中央集権的な支配も容易であった。→②農耕とりわけ稲作においては互いに協力し、調和を保つことが求められ、権威者にも従う必要があった。→③常にまわりに目を配ることで、社会的世界に十分な注意を払うようになった。→④ものごとの原因を「場」あるいは対象物と場の関係の中に見出した。→⑤重要な出来事を検出し、出来事どうしの複雑な関係を理解する認知プロセスが発達した⁽⁶⁹⁾。

このようにニスベットは、認知プロセス(＝見かた)の違いを、生態環境から始まる一連の流れ(シーケンス)によって説明している。その上でニスベットは、このようにして成立してきた視点の違いには、子育ての習慣の違いによって生じた部分もあることを示唆している。また、言語の違いも何らかの役割を果たしていると考えている⁽⁷⁰⁾。ニスベットが示したシーケンスによる説明は、それ自体が分析的な見方によるものである。それは、対象を要素として分離し、そこに原因と結果の連鎖を見いだす。それに対して本稿では、環境の見かたの違いを、場としての環境と人間集団との関係という観点から説明した。環境との関係の中で成立した生業のあり方に対応して、基幹的家族システムが形成され、その中において異なる見かたが優勢となった。そして、その家族システムを通じて、見かたは受け継がれてきたと考えられるのである。

注

- (1) ギブソン(1985)：16.
- (2) 「見かた」の概念については、阿部(1995, 2000)も参照のこと。
- (3) このような関係は、聴覚や触覚といった知覚の全般にあてはまる。とりわけ触覚の場合には、対象への接触と対象の現われは感触というかたちで一体であることが明らかである。
- (4) 無藤(1994)：51-52.
- (5) サックス(2006)：39-40.
- (6) 環境の見かたと家族構造の関係についての詳細な分析は、阿部(2010)を参照のこと。
- (7) よく知られているのが、ユクスキュル&クリサート(1973)によるダニと環境世界との関係である。ダニは全身光覚によって灌木の枝先によじ登り、下を通りかかる哺乳類の皮膚腺から流れ出る酪酸の匂いによって落下し、皮膚の温かさを感じて頭をつっこみ血液を吸う。ダニはこの三つの刺激に従って三つの行動を起こす。この組み合わせが、ダニの環境世界なのである。
- (8) ハイデガー(2010)：265.
- (9) ハイデガー(2010)：261.
- (10) 大山(2000)：52-54.
- (11) ハイデガー(2010)：269-271.
- (12) ギブソン(1985)：137.
- (13) ベルク(1992)：176-177.
- (14) 廣松(2007)：15-60所収の論文「物と事との存在的区別——語法を手掛かりにしたの予備作業」で詳細な議論が展開されている。
- (15) 廣松(1988)：52-53.
- (16) 廣松(2007)：42-43.
- (17) 中村(1989)：175.
- (18) 「場依存性」についての記述は、ニスベット(2004)：56-57及びキムラ(2001)：71, 104に引用された心理学者ハーマン・ウィトキンと共同研究者たちによる研究成果に基づく。
- (19) キムラ(2001)：15-19.
- (20) 空間能力の性差については、キムラ(2001)：66-71に研究者の多数意見がまとめられている。言語能力の性差については、キムラ(2001)：115-130を見よ。
- (21) バロン＝コーエン(2005)：18.
- (22) バロン＝コーエン(2005)：13-14.
- (23) 男性型の脳の利点については、バロン＝コーエン(2005)：209-222を参照した。
- (24) バロン＝コーエン(2005)：11.
- (25) 女性型の脳の利点については、バロン＝コーエン(2005)：222-227を参照した。
- (26) キムラ(2001)：53-54.
- (27) キムラ(2001)：109-111.
- (28) キムラ(2001)：61-63.
- (29) 本郷(2008)：31.
- (30) ダイアモンド(2000)：200-201.
- (31) ダイアモンド(2000)：258.
- (32) 谷(1997)：70-81.
- (33) 有畜麦作と父性偏向家族システムとの関係は、阿部(2011)が詳細に論じている。
- (34) ダイアモンド(2000)：140-143.
- (35) 無畜稲作と母性偏向家族システムとの関係については、阿部(2011)を参照のこと。
- (36) 木田(2004)：49, 62.

-
- (37) ハイデガー(2010)：177.
 - (38) ニスベット(2004)：33.
 - (39) 古澤(2004)：256.
 - (40) 古澤(2004)：72-73.
 - (41) ウェルギリウスの『牧歌』の原語は「ブーコリカ」であり、それは牛飼いを意味するギリシャ語のブーコロスに由来する。
 - (42) 小川(2004)：8-9.
 - (43) 古澤(2004)：264, 小川(2004)：226.
 - (44) その大半は、ヴェズヴィオ山の噴火(西暦79年)によって火山灰に埋もれたカンパニア地方のポンペイなどの壁画に残されている。
 - (45) ペーテルス(2001)：256.
 - (46) 森田(1979)：191.
 - (47) ペーテルス(2001)：258.
 - (48) ペーテルス(2001)：257.
 - (49) ペーテルス(2001)：258.
 - (50) ペーテルス(2001)：256.
 - (51) ベルク(2002)：286.
 - (52) 蜂屋(2008)：116.
 - (53) 小尾(1988)：103.
 - (54) 小尾(1988)：108.
 - (55) 小尾(1988)：8.
 - (56) 小尾(1988)：110-111.
 - (57) 小尾(1988)：113, 117.
 - (58) 松枝・和田(1990a)：94-97.
 - (59) 松枝・和田(1990a)：100-102.
 - (60) 松枝・和田(1990b)：144-145.
 - (61) 小尾(1988)：175-178.
 - (62) 小尾(1988)：173-174.
 - (63) サリヴァン(1995)：208.
 - (64) サリヴァン(1995)：218-219.
 - (65) サリヴァン(1995)：219-220.
 - (66) サリヴァン(1995)：220.
 - (67) 大室(1985)：126-127.
 - (68) ニスベット(2004)：98.
 - (69) ニスベット(2004)：46-51.
 - (70) ニスベット(2004)：184.

引用文献

- 阿部一(1995)『日本空間の誕生——コスモロジー・風景・他界観』せりか書房。
- 阿部一(2000)『空間の比較文化誌』せりか書房。
- 阿部一(2010)「環境の見かたと家族構造」『東洋学園大学紀要』第18号：175-191。
- 阿部一(2011)「家族システムの風土性」『東洋学園大学紀要』第19号：91-108。
- 大室幹雄(1985)『園林都市——中世中国の世界像』三省堂。
- 大山正(2000)『視覚心理学への招待——見えの世界へのアプローチ』(新心理学ライブラリ18)，サイエンス社。
- 小川正廣訳(2004)『ウェルギリウス 牧歌／農耕詩』(西洋古典叢書)，京都大学学術出版会。
- 小尾郊一(1988)『中国の隠遁思想』(中公新書)，中央公論社。
- 木田元編(2004)『哲学キーワード事典』新書館。
- キムラ，ドリーン著，野島久雄・三宅真季子・鈴木眞理子訳(2001)『女有能力，男有能力——性差について科学者が答える』新曜社。
- ギブソン，ジェイムズ・ジェローム著，古崎敬・古崎愛子・村瀬旻訳(1985)『生態学的視覚論——ヒトの知覚世界を探る』サイエンス社。
- サックス，レナード著，谷川澁訳(2006)『男の子の脳，女の子の脳』草思社。
- サリヴァン，マイケル著，中野美代子・杉野目康子訳(1995)『中国山水画の誕生』青土社。
- ダイヤモンド，ジャレド著，倉骨彰訳(2000)『銃・病原菌・鉄(上)』草思社。
- 谷泰(1997)『神・人・家畜——牧畜文化と聖書世界』平凡社。
- 中村雄二郎(1989)『場所(トポス)』弘文堂。
- ニスベット，リチャード・E著，村本由紀子訳(2004)『木を見る西洋人 森を見る東洋人——思考の違いはいかにして生まれるか』ダイヤモンド社。
- ハイドガー，マルティン著，木田元監訳(2010)『現象学の根本問題』作品社。
- バイロン＝コーエン，サイモン著，三宅真砂子訳(2005)『共感する女脳，システム化する男脳』日本放送出版協会。
- 蜂屋邦夫訳注(2008)『老子』(岩波文庫)，岩波書店。
- 廣松渉(1988)『新哲学入門』(岩波新書)，岩波書店。
- 廣松渉(2007)『もの・こと・ことば』(ちくま学芸文庫)，筑摩書房。
- 古澤ゆう子訳(2004)『テオクリトス 牧歌』(西洋古典叢書)，京都大学学術出版会。
- ペーテルス，W・J・Th(2001)「カンパニア壁画における風景」ジュゼッピーナ・チェルッリ・イレッリ，青柳正規，ステーファノ・デ・カーロ，ウンベルト・パッパラルド編，青柳正規・篠塚千恵子訳『ポンペイの壁画(普及版)』岩波書店。
- ベルク，オギュスタン著，篠田勝英訳(1992)『風土の日本——自然と文化の通態』(ちくま学芸文庫)，筑摩書房。
- ベルク，オギュスタン著，中山元訳(2002)『風土学序説——文化をふたたび自然に，自然をふたたび文化に』筑摩書房。
- 本郷一美(2008)「ドメスティケーションの考古学」『総研大ジャーナル』13：30-35。
- 松枝茂夫・和田武司訳注(1990a)『陶淵明全集(上)』(岩波文庫)，岩波書店。
- 松枝茂夫・和田武司訳注(1990b)『陶淵明全集(下)』(岩波文庫)，岩波書店。
- 無藤隆(1994)『赤ん坊から見た世界』(講談社現代新書)，講談社。
- 森田慶一訳註(1979)『ウィトルーウィウス建築書(普及版)』(東海選書)，東海大学出版会。
- ユクスキェル，フォン・ヤーコプ&クリサート，ゲオルク著，日高敏隆・野田保之訳(1973)『生物から見た世界』思索社。